◇ 木野雅之（ヴァイオリン）*Masayuki Kino, Violin*

桐朋学園を経て、1982年ロンドンのギルドホール音楽院に学び、名匠イフラ・ニーマン教授に師事する。音楽院卒業後、ナタン・ミルシュタイン、ルッジエーロ・リッチ、イヴリー・ギトリス等の巨匠に師事し研鑽を積む。1984年、ロンドンで開催されたカール・フレッシュ国際ヴァイオリン・コンクールや、85年パリでのメニューイン国際コンクールで、サロン音楽特別賞を受賞、87年には『ロイヤルオーケストラ協会シルバーメタル』（英国）を授与されロンドン記念演奏会を行った。

英国を拠点にコンサート活動を行っており、ロイヤル・フィル、ベルリン響、ポーランド国立放送響、モスクワ放送響など数多くのオーケストラと共演。また、サンレモ、オールドバラ等国際音楽祭への参加も多く、RTSI（スイス）のテレビ・ラジオに出演。名古屋フィルハーモニー交響楽団のコンサートマスターを経て、93年4月より日本フィルハーモニー交響楽団のコンサートマスターに、02年7月よりソロ・コンサートマスターに就任。

2001年にチェンバー・オーケストラによるコンサート「パガニーニの魅力」を開催、テレビ朝日ブロードバンド・ライブサイトにて放映された。2003年パガニーニ奇想曲第25番「別れの奇想曲」を日本初演及び録音、7月にはフランス・カシス音楽祭にてイヴリー・ギトリス、ルッジエーロ・リッチ、マルタ・アルゲリッチと共演。

オクタヴィア、サウンド＆ミュージック クリエーション他より多数のCD、DVDが発売されており、いずれも高い評価を得ている。

2013年より東京音楽大学教授に就任。また桐朋学園大学、武蔵野音楽大学にても後進の指導にあたっている。

使用楽器は恩師ルッジエーロ・リッチから譲り受けた1776年製ロレンツォ・ストリオーニ。

◇ 藤本史子（ピアノ）*Fumiko Fujimoto, Piano*

九州女学院高校(現ルーテル学院)を経て、国立音楽大学ピアノ科卒業。ピアノを吉川由三子、小池和子の両氏に師事。これまでに、幾多の音楽コンクールで入賞し、2008年、国際ピアノ伴奏コンクール優勝。2009年、日本ピアノ歌曲伴奏コンクール優勝。

2006年、スイスレンク国際音楽アカデミーにて、ソロ、室内楽をアドリアン・コックスに師事し、デュオで共演。〈エネルギッシュな推進力にみなぎり、レンジの広い、デュナーミック、表情豊かに歌うフレーズ等、コックスと一体となった起伏が、まさに表現を実現させていた〉〈ムジカノーバより〉と好評を博す。

NHK交響楽団、九州交響楽団のコンサートマスターや首席、次席奏者、東京ベートーヴェンカルテット、U. ダンホーファー(vn)、A. スコチッチ(vc)、R. ラッコ(vc)、D. タラス(cl)、ウィーンラズモフスキー四重奏団をはじめとする、国内外の著名な演奏家や声楽家と共演中。

現在、フリーのピアニストとして、室内楽、伴奏法を上田晴子氏に師事しつつ、主に日本フィルハーモニー交響楽団ソロ・コンサートマスター木野雅之氏、九州交響楽団首席コントラバス奏者深澤功氏の伴奏者として全国各地で活躍しており、両氏とのCD、DVDもリリース。又、スコットランドDG地球救援音楽祭、球磨川音楽祭、みおつくし音楽祭、八女おりなす音楽祭等にも出演。様々なジャンルのコンサートを企画、出演し精力的に活動中。

◆ プログラム・ノート

■ピッツェッティ：婚約した娘に与える3つの歌 (Affettuoso-Quasi grave e commosso-Appassionato)

イルデブランド・ピッツェッティ（1880-1968）はイタリアの作曲家。近現代の音楽に嫌悪感を示し、初期バロック音楽やルネサンス音楽への回帰を謳ったが、叙情的な旋律、半音階的進行を好む和声法、流麗な転調においてしばしばロマン派、なかでもフランクとの共通点が指摘される。当時の大日本帝国政府の委嘱で皇紀2600年奉祝曲として「交響曲イ調」を作曲するなど、日本とは浅からぬ繋がりがある。「婚約した娘に与える3つの歌」は元々チェロとピアノのための作品。自身の娘マリア・テレサに捧げられており、ほっとするような静けさに満ちている。

■フランク：ヴァイオリン・ソナタ イ長調

ベルギーに生まれ、作曲家・教会オルガニストとしてフランスで活躍した作曲家セザール・フランク（1822-1890）は、半音を用いた独自の音楽語法によりフランスにおけるロマン派音楽を確立した。67年の生涯で彼はヴァイオリン・ソナタを1曲しか書いていないが、この作品は今日でもヴァイオリン・ソナタの最高峰に数えられる。祈りのように始まり劇的な高揚を見せる第1楽章、情熱的な第2楽章、題名どおり幻想的なレチタティーヴォの第3楽章、そして生命力に溢れる第4楽章まで、循環形式（同じ主題が多楽章に繰り返しあらわれて発展する手法）で作られており、見事なまでの統一感が生まれている。歴史的名ヴァイオリニスト、イザイの結婚を祝って彼に献呈された。1886年作。

■ガーシュイン：3つの前奏曲

1926年ニューヨーク市内のホテル・ルーズベルトで披露された作品。ジョージ・ガーシュウィン（1898-1937）は、ニューヨークの下町ブルックリンに生まれ、「ラプソディ・イン・ブルー」「パリのアメリカ人」「ポーギーとベス」など、ポップスやクラシックといったジャンルの垣根を越えた不滅の名曲を多数残している。「３つの前奏曲」は27歳頃の作品で、現代のポップスでいうところのリフが効果的に用いられ、自由度の高い演奏が展開される。元々はピアノ独奏曲だが様々な楽器用に編曲され、広く愛されている。

■シベリウス：3つの小品 作品116

第1曲 舞踏の情景　第2曲 特徴的な舞曲　第3曲 ロマンティックなロンドー

フィンランドを代表する作曲家ジャン・シベリウス（1865-1957）といえば、フィンランドの民族譚を素材とした管弦楽作品やヴァイオリン協奏曲など、大規模な作品が取り上げられることが多いが、歌曲やピアノ曲など魅力的な小品も数多く残している。なかでも、森への散歩にヴァイオリンを携えて出かけたと言われるほどシベリウスにとって特別だったこの楽器のための作品は、彼が本来持つ素朴で生き生きとした感性の発露に満ちている。この、ヴァイオリンとピアノのための3つの小品が作品番号のついた最後の作品となった。

■トロヤン：鶯

チェコの作曲家ヴァーツラフ・トロヤン（1907-1983）が、チェコの人形アニメ芸術の巨匠イジー・トルンカの長編アニメ「皇帝の鶯」のために作曲した音楽。「皇帝の鶯」は、1948年に制作されたアンデルセン原作の映画で、オルゴールの鶯に夢中になった挙げ句、失った物（本物の鶯）の大切さに思いを馳せる幼い皇帝の姿を描いている。オルゴールや鶯の歌など、どこか哀愁が漂い、随所に才能を発揮するトロヤンの音楽が出色で、その後、トルンカの代表作「真夏の夜の夢」でも音楽を担当している。

■サラサーテ：サパテアード ～「スペイン舞曲集」より 作品23-2

パブロ・デ・サラサーテ（1844-1908）はスペインの天才ヴァイオリニスト、作曲家。そのあまりに優れた演奏に同時代の多くの作曲家たちが触発され、サン=サーンス「序奏とロンド・カプリチオーソ」、ラロ「スペイン交響曲」、ブルッフ「スコットランド幻想曲」など、錚々たる作品がサラサーテに献呈されている。また、「ツィゴイネルワイゼン」「カルメン幻想曲」などヴァイオリンのための名曲も数多く自作している。「サパト」はスペイン語で「靴」を意味する言葉で「サパテアード」とはヒールを打ち鳴らしながら踊る激しいスペイン・アンダルシア地方の舞曲のこと。8分の6拍子で足拍子をとる。